小さき大地より

そこはもう、あなたの知っている動物園ではない。

ヒトは動物たちの大地に潜る。

ひとり一人が自然と向き合い、考え、感じる場所。

自然の内なる部分からヒトとの関係性を見つめ直し、

「隔てる境界」から「繋ぐ境界」へ。

都市の一角から遠く離れた野生の地に思いを馳せる、

小さき大地の提案。

1 Background - 動物園という特殊な場 -

動物を見世物にするための牢屋から脱却しつつある「動物園」。生物学の研究や環境教育、種の保存など役割は多岐に渡り、それらは全てこの地球に還元されるものもの。

ヒト、動物とそれに付随する自然一。動物園は考慮すべき要素が多い特殊な場であり、それらの関係は複雑であるのにおいて、それらの境界は流白で、環境教育を謳うにはまこか物足りない。距離が近く様々な角度で見られると観察しやすいが、動物にとってどうだろうか。ジャングルに囲い込んだような演出もよく見られるが、「それらしさ」による表面的なものであり、本質ではない。動物を含む自然の内なる部分に、新しい動物園像のヒントがあると考える。

2 Suggestion - 日常行為を媒介とした境界 -

入園料を払う動物園のシステムは、命に値段をつけているようだ。だからヒトは、動物を見るという楽しみだけを求める。

動物園を訪れることが地球と向き合う手っ取り早いとなるには、ヒトと自然の間に日常行為を媒介とした境界を設定することで、思いがけず自然とヒトの繋がりを感じ、意識を当人させることが必要だと感じる。建築が動物園にできる可能性は、動物の行動を誘発する仕掛けや動物の施設に対応した態度をつくることだけではないはずだ。

それぞれが、ここで得た感動に価値を考える。これが動物園のあるべき姿である。

3 Site - とあるまちの一角にある動物園 -

日本の動物園の8割を占めていると言われる「都市型動物園」のひとつである。現代人が日常生活のその環境を考えるきっかけが少しからこそ、都市に動物園が必要であると感じる。

北に山々を望み、敷地全体が南北に緩やかな傾斜を有する。

敷地面積：約 125000 ㎡

4 Concept - 自然の性格をもとに、境界をデザインする -

自然は脆い。

自然はヒトの手によって簡単に壊れてしまう不器用な存在である。ヒトが一歩引くことで自然が近に出る。すなわち自然の領域を尊重した関係性を保つことが必要だ。

▼

動物園域の形態操作によって生まれるスキマにヒト領域を配することで、「動物領域ヒト領域」の構図を実現する。敷地面積を動物たちのために最大限利用する。

自然は語る。

アニミズムが自然の中で発生したように、自然はヒトを惹きつける力を持つ。自然とヒトの関性が共鳴した時、都市生活で忘れていたものを呼び起こさせてくれるだろう。

▼

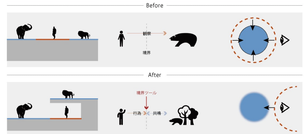
動物を含む自然の場所性とそれに紐付くヒトの日常のアクティビティを繋ぐ。単に動物を観賞するという一方的な機能を超え、都市に生きるヒトでは無縁な、特別な空間と出会う。

自然は我儘だ。

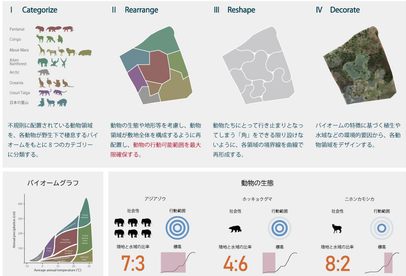
自然は自由に振る舞い、ヒトの期待を裏切ることもある。日々向き合えべきいつも通り順調に出会うからこそ覚える感動であり、そこに自然を見出すのではないだろうか。

▼

いつも思い通りに動物を見ることができるとは限らない。季節や天候にもたたされるだろう。ありのまま通こ了動物に対し、ヒトは陽ちた動線から、一面的なアプローチをする。



5 Method A - 「人工的な自然」に生きる、動物領域のつくりかた -



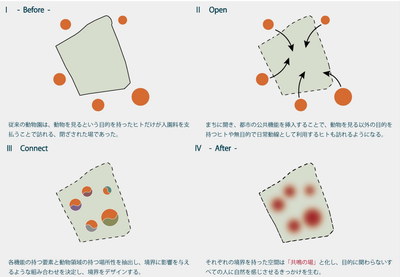
不規則に配置されている動物領域を、各動物が野生で棲息するバイオームをもとに 5 つのカテゴリーに分類する。

動物の生態や地形等を考慮し、動物領域が敷地全体を構成するように再配置し、動物の行動が最適調整を最大限確保する。

動物たちにとって行きと戻りとなってしまう「角」をできる限り設けないように、各領域の境界線を曲線で再形成する。

バイオームの特徴に基づく植生や水域などの環境の要因から、各動物領域をデザインする。

6 Method B - 「小さき大地」に潜る、ヒト領域のつくりかた -

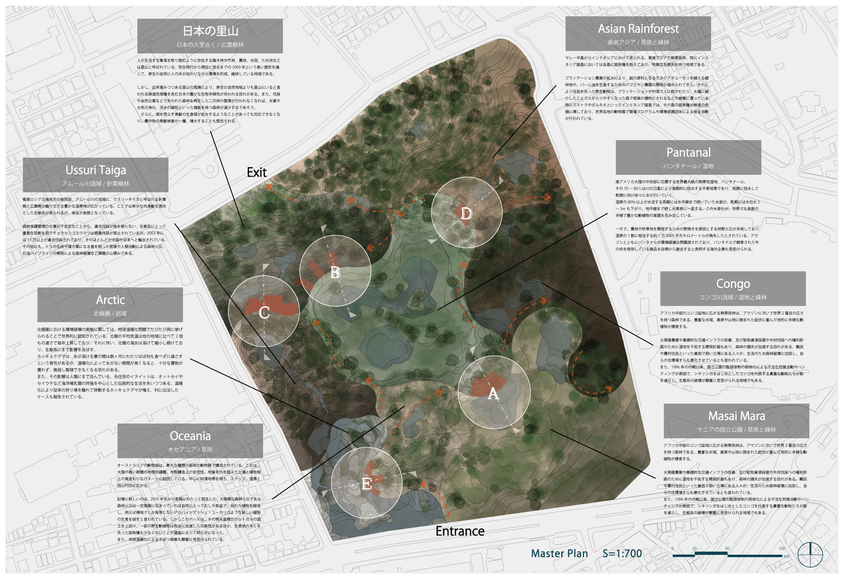


従来の動物園は、動物を見るという目的を持ったヒトだけが入園料を支払うことで訪れる、閉ざされた場である。

まちに開き、都市の公共機能を挿入することで、動物を見るに外の目的を持つヒト今無目的で日常動線として利用するヒトも訪れるようになる。

各構造の持つ要素と動物領域の持つ場所性を抽出し、境界に影響を与えるような組み合わせを決定し、境界をデザインする。

それぞれの境界を持った空間は「共鳴の場」と化し、目的に関わらないそれぞれの人に自然を感じさせるきっかけを生む。


日本の里山
日本の人里近く / 広葉樹林
人が生活する集落を取り囲むように形成する雑木林が所、農地、水田、ため池などは豊かな生物が生息する。特生物がより現在に近まるにつれ、特異な生態系が生じ始まる。しかし、都市化が進むにつれ生息の場所は、狭小化の形所域まで小規模化は進む。
Asian Rainforest
アジアの熱帯地域に広がる、雨が多く年中暖かい地域。特に、インドネシアの熱帯地域は、世界の生物多様性の中心地とされ、特異な生態系が生じ始まる。
プランテーションと農業の拡大により、絶滅の危機に陥るアジアゾウ。そこで、残る土地の中、パーム油を栽培するための巨大なプランテーション農園の開発が進められている。それにより生息地を失う動物たちは、プランテーションなどの中間大は人間とぶつかり、人命に繋がることもあるため、その中でも人命の保護の観点から、人命を優先するためにプランテーションを囲む形、その他の場所動物の移動を妨害しないように、世界自然の観点の観点で設計されている。
Ussuri Taiga
アムール川流域 / 針葉樹林
極東ロシア沿海地方の南部に、アムール川の流域に、ウラリーキズ山脈が広がる針葉樹と広葉樹が織りなす豊かな森林が広がっている。ここでは絶滅危惧種の虎がいるとされ、世界自然遺産に指定されている。
森林保護管理が行き届かず、密度が高くなっている。
Pantanal
パンタナール / 湿地
南アメリカ大陸の中央部に位置する世界最大級の熱帯湿地。パンタナール。
年間一回の洪水が起こり、広大な面積が水没する。
一方で、農地や牧草地を開発するための開発を原因とする乾燥が起こり、乾燥に伴う森林火災が起こり、生物多様性が失われつつある。
Congo
コンゴ川流域 / 湿地と森林
アフリカ中部のコンゴ盆地に広がる熱帯雨林。アマゾンに次いで世界 2 番目に広大な熱帯雨林である。豊富な水域、豊潤な土地に育まれた起伏に富んだ地形に多様な動物が棲息する。
大規模農業や資源採掘や交通インフラの発展、及び気候変動が原因で年々悪化への進行が進んでおり、森林の面積が減少する。
Arctic
北極圏に近かく、厳寒地帯に属する。
ホッキョクグマ、北極キツネ、ユキヒョウ、ホッキョクウサギ、ホッキョクライチョウ、ホッキョクフクロウ、ホッキョクウルフ、ホッキョクギツネ、ホッキョクジカ、ホッキョクトナカイ、ホッキョクウサギ、ホッキョクヒツジ、ホッキョクジャコウウシ、ホッキョクキツネ